

中学への移行に伴う精神的死に対する認識の変化の解明 —自我体験経験の影響を手がかりとした実験的インタビュー調査より—

天谷祐子
(名古屋市立大学)

<要 旨>

中学生が学校移行に伴って、物理的死に付随して精神的にも死と捉えるのか否かという問いについて、実験的インタビュー調査により発達心理学的に明らかにすることを目的とした。小学校6年生16名、中学1年生17名を対象に、死・脳死状態の人のイラストを示しながら、「怒りを感じる」といった項目についてできるかできないかの回答を求めた。その結果、小学校6年生群も中学1年生群も死後における機能を概して認めず、学校移行に関係なく一貫していた。脳死状態における機能については、5年生から6年生にかけて変化がやや見られ、6年生から中学1年にかけてはあまり変化しないことが明らかとなった。また「お母さんを大切に思う」ことに関しては脳死状態で機能を認める回答者が中学1年生群で半数、小学6年生群で3割強見られ、特別な強い思いについては機能し続けると捉える人がいることが示された。死に関する科学的知識を持ちながらも死後や脳死状態の機能を認める場合があることについて、人の生得的なメカニズムに照らして議論された。

<キーワード> 精神的死、中学生、自我体験、インタビュー調査

【はじめに】

中学生の自殺問題対策は、教育現場・行政における喫緊の課題である。本研究課題は、中学生が「死」に関して、物理的死に付随して精神的にも死と捉えるのか否かという問いについて、発達心理学的に明らかにする。中学生の自殺の背景には多様な問題が関与していると考えられるが、一つに「死は苦難からの解放」とみなしたり、「物理的に死んでも精神はどこかにあり続ける」といった精神的死を認めなかったりする価値観が存在すると考えられる。「死をどのように捉えるか」を率直に議論する土壌が中学生の生活の場にあるならば、安易に死を選択したり死を軽んじたりする行為を防ぐことができるだろう。本研究課題は、中学生の死に対する捉え方の基礎的資料を提供するものである。

丹下(2004)は、中学生の死生観に関する質問紙調査を通して、学年が上がるに従い、死を苦難からの解放とみなす考えを否定しなくなる傾向と、身体とは別の生の存在を考えるようになる傾向を見出している。一方で岡田(1998)は、死の普遍性・死の不可避性を9歳から11歳の子どもの7割が理解していることを示している。死に関しては、質問のされ方によっては、本人も気づかない形で矛盾した回答をすることが、老年期を対象とした研究から明らかになっている(河合ら,1996)。上記の研究に関しても、「児童期の子どもは死を客観的に理解しているにも関わらず、中学生になると死の捉え方が変化してしまう」と捉えるのではなく、子ども達が気づかずに矛盾したまま並存している可能性が考えられる。本

研究課題では、迷いや回答の変更が許されるインタビュー調査を通してその点を明らかにする。

本研究課題では、小学校6年生と中学1年生の子どもを対象に、死・脳死状態になった際に物理的活動や精神的活動を認めるか否かについて、個別インタビュー調査を実施する。この時期における物理的死に付随した精神的死についての捉え方について、発達的变化を明らかにする。併せて「私はなぜ他の人ではなく私なのか」という問い—自我体験—を考えた経験の有無についても尋ね、精神的死に関して、自己のかけがえのなさの感覚の寄与の程度も明らかにする。これにより、中学校への学校移行に伴う死に対する認識の理解のあり方を解明する。

この研究課題遂行に際し、小学校高学年生に端を発し、中学生になると社会的問題となっている自殺問題や死を軽んじる行為に関わる問題について、基礎的知見を提供できる。さらに、現在の学校教育において、特定の宗教に偏らず、死をダイレクトに扱う基礎的知見を周知しながら、死に関わる議論の場を持つことは、日本の教育現場で行うことのできる数少ないデス・エデュケーションの方略の一つであると考えられる。またターミナルケアをはじめとした医療現場に携わる人々や、死とどのように向き合うかが発達課題である老年期にある人々に対しても、新たな議論を喚起する知見を提供できると考えられる。

【方法】

(1)調査協力者:小学6年生・中学1年生 33名(小学6年生16名、中学1年生17名)であった。男女比は小学6年生男子5名、小学6年生女子12名、小学5年生男子10名、小学5年生女子6名であった。全ての協力

者が1年前に1回目の研究協力をした。なお全ての協力者とその保護者に対し、研究内容の説明を行ったうえで、書面で研究協力の承諾を得た上で調査を実施した。

(2)調査項目と手続き:死んでいる人・脳死状態の人のイラスト(Figure1)を示しながら、それぞれの人について「怒を感じる」、「お母さんのことを大切に思う」という9項目(Bering & Bjorklund,2004)について、○(できる)か×(できない)かのどちらかの回答を求めた(分析においてはうち7項目を使用した)。その後なぜそのように回答したのか、その理由を尋ねた。また、「私はなぜ他の人ではなく私なのか」という問い—自我体験—に関する質問15項目(天谷,2005)に対して5件法で回答を求め、最も思ったことがある項目について自由記述を求めた後、詳細についてインタビューした。一人当たりの所要時間は30分から50分であった。

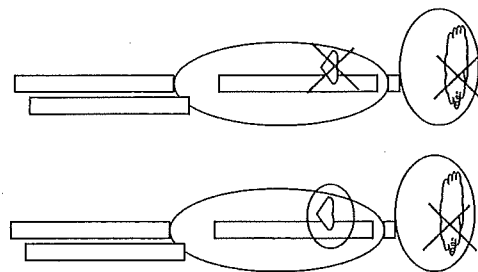


Figure1. 死んでいる人(上)・脳死状態の人(下)のイラスト

【結果】

(1)小学6年生の死・脳死状態における判断

小学6年生群(16名)と中学1年生群(17名)の2群に分けて分析を行った。まず小学6年生群における死後の機能に関して Table1 上段に結果を示した。1年前(5年時)と今回(6年時)の双方で「○(できる)」と回答した人は7項目中5項目がゼロであり、2項目(「家に帰り

りたい、「お母さんを大切に思う」)が2名であった。脳死状態の機能に関して、2回ともに「○(できる)」と回答した人は、7項目中6項目が3名以下であり、「お母さんを大切に思う」のみ5名であった(Table2下段)。また2回の回答の一貫性を示す指標としてCramerのVを算出した結果、死後の機能に関しては、7項目中、2回ともに回答が完全一致した4項目以外の2項目で有意であった(「家に帰りたい」が.655($p<.01$)、「お母さんを大切に思う」が.787($p<.01$)。脳死状態の機能では、7項目中1項目で有意であった(「お母さんのことを大切に思う」が.595, $p<.05$)。

(2) 中学1年生の死・脳死状態における判断

中学1年生群における死後の機能に関してTable1下段に示した。1年前(6年時)と今回(中学1年時)の双方で「○(できる)」と回答した人は7項目中1項目がゼロであり、その他の6項目では1名~6名であった。脳死状態における機能では、2回ともに「○(できる)」と回答した人は、7項目中2項目が3名以下、5項目は4名~8名であった(「お母さんを大切に思う」が8名であり、2回ともに「×(できない)」と回答した6名を上回る人数であった。Table2下段)。またCramerのVを算出した結果、死後の機能に関しては7項目中2回ともに回答が完全一致した2項目以外の3項目で有意であった(.673~.718, $p<.01$)。脳死状態

Table 1 死後の機能についての判断結果

	おなかがすく		眠い		鳥が歌うのを聞く		家に帰りたいと思う		怒りを感じる		お母さんを大切に思う		きょうだいのことについて考える	
	2回目		2回目		2回目		2回目		2回目		2回目		2回目	
	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○
1回目 (6年生)	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○
	16	0	16	0	16	0	12	0	16	0	13	0	15	1
	○	0	○	0	○	0	○	2	○	0	○	1	○	0
χ^2 検定or フィッシャー直 接法	-		-		-		$p<.05$		-		$p<.05$			
CramerのV							.66**				.79**			
1回目 (中学1年生)	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○
	15	0	16	0	12	1	11	0	13	1	10	0	10	1
	○	1	○	1	○	3	○	5	○	2	○	6	○	4
χ^2 検定or フィッシャー直 接法					$p<.05$									
CramerのV	.69**				.67**		-				-		.72**	

注1.**: $p<.01$

注2.2値のいずれかを選択できない協力者の値はTableから除外した

Table 2 脳死状態における機能についての判断結果

	おなかがすく		眠い		鳥が歌うのを聞く		家に帰りたいと思う		怒りを感じる		お母さんを大切に思う		きょうだいのことについて考える	
	2回目		2回目		2回目		2回目		2回目		2回目		2回目	
	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○
1回目 (6年生)	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○
	9	1	9	2	8	4	7	2	8	4	7	0	8	3
	○	3	○	3	○	2	○	2	○	4	○	4	○	1
χ^2 検定or フィッシャー直 接法											$p<.05$			
CramerのV											.60*			
1回目 (中学1年生)	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○
	7	3	10	1	9	0	9	0	12	2	6	2	9	1
	○	1	○	5	○	4	○	2	○	3	○	8	○	6
χ^2 検定or フィッシャー直 接法					$p<.05$		$p<.01$				$p<.05$		$p<.01$	
CramerのV	.52*				.66**		.69**				.65**		.76**	

**: $p<.01$,*: $p<.05$

注2.2値のいずれかを選択できない協力者の値はTableから除外した

の機能に関しては、7項目中5項目で有意であった(.516~.757, $p < .05 \sim .01$)。

(3)死・脳死状態の機能の判断における自我体験の経験による影響

死・脳死状態の機能の判断に関する7項目について「○(できる)」と回答した場合を1点、「×(できない)」と回答した場合を0点とし、7項目の回答を合計して得点化した。自我体験の経験の有無について、天谷(2005)の分類方法に基づいて「経験」・「未経験」・「報告不十分」の3群に分類した。「経験」群は質問紙における自由記述内容が内容的に自我体験とみなせると判断された群であり、「未経験」群は質問紙における自我体験尺度の評定が全て低くかつ自由記述が見られなかった群である。「報告

不十分」群は、質問紙における自由記述内容が、自我体験とみなすには報告内容が不十分であり、「経験群」と「未経験群」のいずれにもあてはまらないとされた群である。

死・脳死状態の機能に関する7項目の得点に関して、自我体験の経験(経験/未経験/報告不十分)と時期(1回目/2回目)による2要因分散分析を行ったところ、脳死状態の機能に関して時期の主効果のみ有意傾向が見られた(Table4参照)。1回目の得点の方が2回目の得点よりも認める割合が高い方向の傾向であった。死の状態の機能に関しては有意差は見られなかった(Table3参照)。

(4)死・脳死状態の機能の判断の理由に関する報告

Table3 死後の機能に関して得点化後分散分析結果

	N	1回目	2回目	F
未経験群	5	.20 (.45)	.00 (.00)	時期: .86,n.s. 群間: 1.29,n.s.
報告不十分	10	.90 (1.52)	.60 (1.26)	交互作用: 1.34,n.s.
経験群	16	1.25 (1.69)	1.38 (2.00)	

注.上段は平均値、下段はSD

Table4 脳死状態における機能に関して得点化後分散分析結果

	N	1回目	2回目	F
未経験群	5	2.20 (2.49)	1.40 (1.34)	時期: 3.34, $p < .10$ 群間: 0.26,n.s.
報告不十分	10	3.10 (2.18)	1.90 (2.33)	交互作用: 1.42,n.s.
経験群	16	2.50 (2.28)	2.50 (2.13)	

注.上段は平均値、下段はSD

7項目の回答の理由に関するインタビューデータについて、Table5についてはほぼ全ての質問に対して「×(できない)」と回答した協力者の理由の報告をまとめた。そして、Table6については、脳死状態のみ「お母さんを大切に思う」に対して「○(できる)」と回答した協力者の理由の報告をまとめた。さらにTable7については、死の状態と脳死の状態のどちらも「○(できる)」と

Table5 脳死・死ほぼ×と回答した理由

- | | |
|-------|---|
| ・中1女子 | 完全に死んでる、死んじゃってるので、普通に考えたら全部できないかなって。(脳死状態は)心臓は動いていても、やっぱり考えたりとか、動いたりとか、そういうことが全部脳ができない、できないってことはできなくなるので、頭を使うっていうか、脳が命令するみたいなのがあるので、無理かなと思いました。 |
| ・6年男子 | 脳みそが止まっていたら心臓が動いても、脳みそが止まったら自分的にまず、考えたりやろうかなと思ったりできないと思うから、全部できないと思う。考えるとか感じるとかそういうやつは、脳みそで聞いた言葉を理解してそう思うわけだから、△さんは脳が死んでいるわけだから、感じたりはできないけど、.. |
| ・6年男子 | 大きくなってから想像力なくなってきたからかもしんないですけど、まず脳が動かないんで、感じるができない。二個目の質問(脳死の人)にも感じることもか思うことができないので、それ系はダメだと思います。(それ系とは)考える、思う、感じる、願う、聞く。(脳死の人)脳が止まってるからダメですね。 |
| ・6年女子 | 感情は脳が、停止してたらできないかなと思って。(感情というのは)おなかがすくからきょうだいのところまで。 |

Table 6 脳死状態のみ「お母さんを大切に思う」に○(できる)と回答した理由

- ・6年女子 お母さんはずっと一緒だから、ずっと一緒にいたから、大切に思う、だと思うから○だと思いました。
- ・6年女子 脳みそは死んでいても、心は生きているかなあ、なんとなく。
- ・中1女子 大切に思うのは、脳がなくても、言わなくても思ってるだけって感じだから、できそう。思いだけだから。
- ・中1女子 (脳死は)一応生きてるっていうか、心臓動いているから、なんか考えると、ちょっとはできるかなっていう感じで。

Table 7 死の状態と脳死状態どちらも○(できる)と回答した理由

- ・6年女子 優しい感情だけは何か残っているのかなあみたいなそういう感じ。
- ・中1男子 たとえ死んでしまったとしても、気持ちだけはあと思うので、だからお母さんを思ったりとか、きょうだいとかを思ったりとかはできると思ったからです。(脳死の人は)植物人間でも何かを思うこととかは、感じるとかそういうことはできるとか聞いたことあるので、早く治って願ったりとか、できると思います。
- ・中1女子 (死んでる人の家に帰りたいは)家族に会いたいのかなって思って、で死んでしまったらもう会えないじゃないですか。だからやっぱ、死んでもそういうことは思うのかなって思って。(脳死の人は)「思う」とかは心。なんていえばいいんだろう、心で思うことってなんか、それは思うのかなって。
- ・中1女子 お墓にお参りに行ったりとかして、お参りするじゃないですか。そうするとなんか気持ちが伝わったような気がして、で多分お墓の中にも気持ちが残ってるんじゃないかなって。気持ちはなんか残ってて、いつもそばにいてくれるんじゃないかなって思うんです。怒りを感じるっていうのは気持ちはなんか優しい気持ちしか残らないんじゃないかなと思うんです。だから怒りとかそういう嫌な気持ちになることはしないと思います。
- ・中1女子 死んでもたましい的なのが残ってるじゃないですか。だから、自分を産んでくれたお母さんと、今まで支えてくれたきょうだい？については考えたり大切に思ったりすると思います。

回答した協力者の理由の報告をまとめた。

Table5 における死・脳死状態では「×(できない)」と回答した理由について、脳が停止した場合、「思う」・「考える」といった精神的活動について、脳が停止したらできなくなるという理由を挙げていた。そして Table6 において脳死状態のみ「○(できる)」と判断するのは、心臓が活動していることが「生きている」ととらえられおり、「生きている」ことによって精神的活動は可能であるという考え方が理由の第1に挙げられた。理由の第2には、脳が活動していても、脳の活動とは別に、大切な思いについては機能し続けるという考え方が理由として想定されていることがわかった。最後に Table7 において、死・脳死状態のいずれについても「○(できる)」と回答した理由について、脳や心臓が停止したとしても、身体の物理的活動とは別に「気持ち」といった精神的な部分がどこかに残っていると捉えることが挙げられた。

【考察】

本研究の結果、小学6年生群も中学1年生群も死後における機能を概して認めず、学校移行に関係なく一貫した回答であった。しかし脳死状態における機能に関しては、5年生から6年生にかけて回答がやや変化し、学校移行期である6年生から中学1年にかけてはあまり変化しないことが明らかとなった。つまり精神的死に対する認識は、中学への学校移行に伴う変化ではなく、発達的にはそれより1年前の時点で変化していることが示唆された。

またこの知見は、日本の学校教育においては、小学校6年生前半に理科において身体の仕組みを体系立って学ぶことが影響を及ぼしていると考えられる。ダイレクトに死に伴う機能の判断は求められなくとも、生命が維持される身体の仕組みを学ぶことを踏まえ、精神的死に関して自身の捉え方(機能を認めるにしろ認めないにしろ)を見出している可能

性が考えられる。

死・脳死状態における機能に関して項目別に見てみると、「お母さんを大切に思う」ことに関して、死の状態でも機能を認める(できると回答する)協力者が少数ながら、また脳死状態で機能を認める協力者が中学1年群で半数弱、6年生群で3割強見られた。「家に帰りたいと思う」についてもそれに準じる結果であった。これは大学生を対象とした Amaya (accepted)では見られない傾向であり、「特別な強い思い」については、他の機能と異なり中学生になったとしても、児童期以前の主観的判断から脱していないか、またはこの判断が一過性であり大学生になるまでの間に、もう一度判断が変化するタイミングが存在するのかなのいずれかであることが考えられる。小学6年生と中学1年生が科学的知識を理解し、死の普遍性に対する知識も理解しながら、死後の精神的活動を認める回答を部分的項目であっても多くの人に出現した点は貴重な知見である。この点について、Bering(2011/2012)は、科学的な知識をたとえ持っていたとしても、人は死んでも心は残ると生得的に考えてしまう認知的メカニズムを持ち合わせていることを指摘している。本研究の知見はその一部をキリスト教圏でない日本人データにおいて検証したものととらえることもできよう。

なお死・脳死状態における機能に対する判断に関する自我体験の経験の影響については、明確な結果は得られなかった。しかし、脳死状態における判断については、時期の有意傾向の効果が出た。各群に割り振られる人数が少なかつたため、詳細は今後の研究にゆだねられるが、他の群に比べ、自我体験経験群が2回の調査において回答を変更しない可能性と、死後の機能について認めやすい可能性が

方向性として考えられる。

本研究の問題点として、調査協力者は、中学1年生群が女子の比率が高めであり、小学6年生群が男子の比率が高めであったことが挙げられる。本研究では、中学1年生群の1回目の結果と小学6年生群の2回目の結果が多少異なるものとなった。それが、同じ質問を2回尋ねたことによるものなのか、各学年の協力者の性別の比率によるものなのかを検討することができなかった点が問題と考えられる。今後研究協力者の人数を増やし、かつ性別の比率を同等にしたうえで、死・脳死状態における機能に対する判断に、子ども達のような文化的・宗教的背景が影響を及ぼしているのかについて明らかにしていくことが望まれる。

【文献】

- 天谷祐子. (2005). 自己意識と自我体験—「私」への「なぜ」という問い—の関連 パーソナリティ研究, 13, 197-207.
- Amaya, Y. (accepted). Developmental shift in children's judgment of posthumous functioning after learning the mechanism of human body. European conference on developmental psychology (poster).
- Bering, J. & Bjorklund, D.F. (2004). The Natural Emergence of Reasoning about the Afterlife as a Developmental Regularity. *Developmental Psychology*, 40, 217-233.
- Bering, J. (2011). The Belief Instinct. 鈴木光太郎(訳). (2012). ヒトはなぜ神を信じるのか—信仰する本能 化学同人
- 河合千恵子・下仲淳子・中里克治. (1996). 老年期における死に対する態度 老年社

会科学, 17, 107-116.

岡田洋子. (1998). 子どもの死の概念 小
児看護, 21, 1445-1452.

丹下智賀子. (2004). 青前期・中期における
死に対する態度の変化 発達心理学研究,
15, 65-76.